

でんでら通信 第四百三十三号 令和八年三月

坐禅会

三月二十九日(日) 十時より開催します。  
みなさんのご参加お待ちしております。

はなまつり

四月八日(水)はお釈迦様のお生まれになった日です。当寺では、門前に花御堂をまつり甘茶供養いたします。みなさんでお祝いしましょう。

庫裡(くり)について

三月に入りました。この時期は三寒四温、少しづつ春に近づきつつあります。ありがたいことに、この地方の冬は雪も少なく助かりました。しかしいつもながらの鈴鹿おろしの寒風はやはり身体にこたえるものです。特に当寺の住まいである庫裡(くり)、お寺の家族が住む住居のことは、昔ながらの家屋で断熱材もなく、すきま風が入りこむ建物です。本当に寒い！

そこで先日より改築できないか業者も交えて検討しているところです。その際に、この庫裡はいつ頃建てられたのでしょうか？という質問に対して調べてみました。

寺の歴史を古文書から紐解きますと、庫裡が建てられたのは、嘉永3年(1851年) 禅林寺第九代住職大桂和尚の時、今から175年前でした。江戸

時代の徳川十二代將軍徳川家慶とくがわいさむねの頃で、明治維新の

きつかけとなるペリー来航の二年前でした。

お寺は長い歴史を経て現在に至っていますが、その当時建てられた柱や梁は今も頑として原型をとどめています。たぶん昔は煮炊きに釜やおくどさんで薪を室内で使っていましたから、燻(いぶ)られ腐ることがなかったのではないかと推測します。

歴史ある建物の資材をできれば再利用したいと考えています。

仏心

東京の金龍寺住職 並木泰淳師のおはなしです。

並木さんが、法事のためにとある電車に乗っていた時の話です。

車内に赤ちゃんの笑い声が聞こえて、読んでいた本から目をそらすと、お父さんが支えるベビーカーに二歳くらいの男の子が寝ていて、お母さんの胸元には赤ちゃんが笑顔を振りまいていたというのです。微笑ましい光景でありました。

ところが数分後に、その男の子の大きな泣き声が響いたそうです。そして泣き続けたあげく、むせ込んで車内に吐いてしまったのです。慌てたお父さんがトートバッグからティッシュか何か探そうとしたようですが見つからず、お母さんも寝ている赤ちゃんを抱いているので、思うように男の子に近づけません。

並木さんが即座にティッシュを出して手渡そうとすると、想像もしなかった光景が目の前に広がりました。それは四方八方の人たちからティッシュやタオルが差し出されたのです。

こぼれた物は大量ではありません。一袋のティ

ッシュでも足りたことでしょう。しかし、お父さんはひとりひとりに丁寧な頭を下げながら「ありがとうございます」とお礼を言って差し出された全てのティッシュやタオルを受け取りました。そして床を綺麗に拭きあげたのです。

男の子もいつの間にか泣きやんで、車内は穏やかなほっこりとした空気に包まれました。

真心で差し出したティッシュを、真心で受け取ってもらえました。その時、私は忘れていた大切な何かを見つけた気がしたのです。差し出したティッシュを、お父さんに「ありがとうございます」と受け取ってもらいましたが、思わずこちらも「ありがとうございます」と言いたくなるような心持ちがしたのでした。見ず知らずの人も、どこかで自分と繋がっていることを実感した出来事でした。

誰もが愛情豊かに一生懸命子育てしていた夫婦が困り果てた姿を目の当たりにしたら、思わず手を差しのべるのであり、これが仏心の表れの一端です。そしてその仏心というのは、親に嫉(しつけ)られるものでも、学校で教わるものでもなく、生きとし生けるものが普遍的に具(そな)えるものでしょう。

「仏心」とは、他の誰かの喜びや悲しみを、ありのままに自らの喜び悲しみとして受け入れる「智慧」と、困っているひとに即座に手を差し伸べることが出来る「慈悲」の心を指します。「仏心」が必ず自分にも具わっている信じ、坐禅や日常生活を通して、もう一度自身の中に見出そうとする教えが臨済宗の教義の根幹です。禅宗は古来より「仏心宗」といわれる由縁はここにあります。